

# お江戸の娘

理論社

# 今江祥智 の本

第34巻

お江戸の娘

今江祥智の本第34巻

一九九〇年十月初版

一九九〇年十月第一刷

著者 今江祥智◎

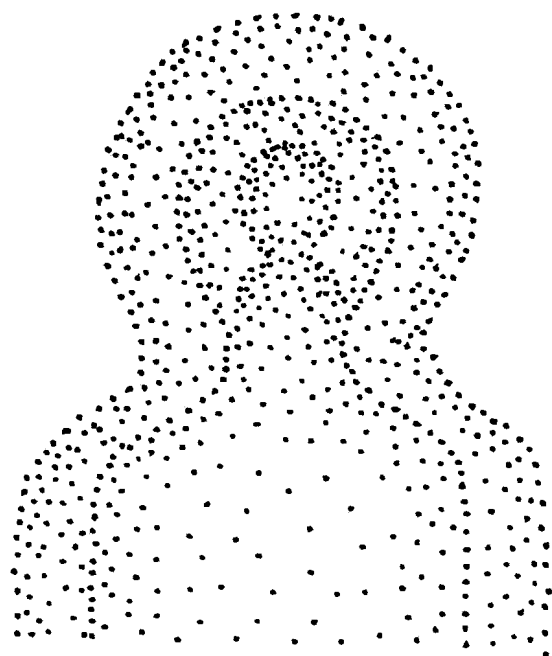
発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三)五七九一〈代表〉

振替東京九―九五七三六

著丁・乱丁本はお取り替えます。



## a

### 家族の肖像

7

おふくろのいくつもの顔

9

病院で

71

おふくろさんの一品料理

73

おやじの部屋

76

内なる父親

79

兄の死

81

家族

83

お江戸の娘

86

愛犬ムックのなわばり図由来

117

犬こそやはり最良の友

119

## b

### 記憶の隙間

129

につぼん橋界限の話

124

ああ、イワナミブニコ

121

記憶の隙間

131

あの日あのこと

135

有難い癖

138

早起きのすすめ

141

王侯と農奴

143

ああ、ロマン・ロラン

147

十五年前 十五年後

150

山上の教訓

152

|             |     |                 |     |
|-------------|-----|-----------------|-----|
| ある流儀        | 154 | 時間遡行            | 232 |
| 通い猫三代       | 157 | 体験的教育論          | 235 |
| 潮音風声        | 160 | 広告狩人            | 238 |
| 木造校舎のこと     | 185 | 京の海・今日の海        | 241 |
| 水が美味しいこと    | 187 | “お古い” 生き方といわれても | 245 |
| 小さい人 若い人 人間 | 188 | 宅間さんのこと         | 250 |
| 会議は踊るほうがよい  | 215 | 花梨まで            | 255 |
| すてる         | 218 | 死の周辺から          | 259 |
| 文楽座のこと      | 221 | 寺の記憶            | 264 |
| 奥付読み        | 223 | あとがき            | 273 |
| 書斎の幸福・書斎の不幸 | 228 | 解説 岡部伊都子        | 277 |

編集 小宮山量平

装幀 平野甲賀

装画 長新太

制作 山村光司

発行 鈴木良司

製作担当 金井重雄

下向実

編集担当 日比野茂樹

高林久美子

成澤榮里子

製作 P & P

本文 加藤文明社／よねむら写植

表紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

製本 誠製本

用紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本  
第34巻

お江戸の娘



**a**

家族の肖像



## おふくろのいくつもの顔

### 1 おふくろさんの理屈

おやじどのが早く逝<sup>い</sup>ったから、わたしは母さんっ子で育った。おやじどのは、あのいくさを知らずに、昭和十六年の六月に逝った。医者のみたてちがい、軽い風邪程度向きの投薬ですませている間に、切り傷から入った「毒」が脳にまわっていて、それと分かったときは手遅れだった。あまりにあっけない急死だったので、亡くなったあとも本当にできなかった。旅の多いおやじどだったから、いまにもふいと帰ってきそうで、家族全員それぞれに待っているようなところがあった。

しかし、むろん、おやじどのは帰ってこなかった。

だからおふくろさんは、そのあと、あのいくさの間から敗戦後にかけて、育ち盛りの男の子を二人、女手ひとつで育てることになる。さぞやきつかっただろうと思うが、おふくろさんはわたしたち兄弟の前では、つらい顔も、つらそうな様子も見せたことはなかった。

おやじどのにもう一人の女性<sup>ひと</sup>がいたことが分かったときのことを話してくれたおりも、淡々としていた。なに

しろ、おやじどのの葬式に、その女性を招んだくらい、ふとっばらというおか、気もちが広いというおか、いや、独特の理屈の持ち主であった。

―そらわたしかて、おとうさんにそんな人がいてはと分かったときは修羅場でおました。そやけど、まがりなりにも認めてしもた以上、おとうさんの世話もしてもらた人を、招ばんわけにはいきません。だいいち、おとうさんが寂しがらります。

というのである。親戚じゅうが止めたが、おふくろさんは断固として電報を打った。

おかげでわたしち兄弟は、それとは知らずに、おやじどのが愛したもう一人の女性を見ることになる。おやじどのの柩を前にして、その人はおふくろさんの前に両手をついて泣いており、そのあと二人は、柩に向かって慟哭した。小柄色白で美しい人だという印象は、以来消えない。

これは、つい先だって読んで知ったのだが、かのエーリヒ・ケストナーの若い愛人のせりふとは正反対の、おふくろさんの理屈のおかげで見ることのできた光景だった。

ケストナーが亡くなったあと、長年同棲していたルイーゼ・ロッテが、せめて骨になったら、わたしをケストナーの傍に埋めてほしいと頼んだとき、若い愛人はにべもなしに断ったうえでこう言っただけ。

―そのかわり、わたしも横に入れてもらいません。エーリヒは孤独を愛した人でした。一人で眠るのがよろしいでしょうから……。

それはさておき、おふくろさんの理屈は、やはり明治生まれの人間しかもてないものだった。こんなこともあった。

敗戦後、兄貴が「左」に走った。軍国少年だった反動で極端に左に揺れた。当時、軍部から流れたさまざまな

物資があちこちに隠されていた。いわゆる隠退蔵物資というやつである。それを「摘発」する一隊があり、兄貴は、その先頭にたつて勇躍、隠し場である工場へ突入した。物資は確に見つけたが、ほめられる代りに、兄貴ら何人かは不法侵入のかどで警察につかまった。先頭にいたから、新聞の写真では顔がはっきり写っていた。

親戚が騒ぎたて、親族会議が開かれ、廃嫡処分にするべしという結論になった。そのとき、おふくろさんは全親戚に宣戦を宣言した。

—うちの子はなにもドロボーしたとか、人殺したわけやありませんやろ。思想<sup>シンギ</sup>（おふくろさんはこの言葉を齒槽膿漏のシソーと同じように発音した）にはいろいろありますやろ。いまはもうシソーの自由の時代だすやろ。付き合いを絶てと言わはるんなら、そうさせてもらいます。

切り口上であつた。親戚が折れた。

そのくせ、兄貴がブタバコで正月をこさねばならぬと分かったとき、なんか差し入れもっていったら……と言わしたしの提案を、おふくろさんは、きっぱり拒絶した。好きなシソーのために入ってる以上、それくらい不自由を耐えるのが当然、シソーにわるおますやろ……という理屈らしかった。

それでいて、いざ出所（？）の日には、神戸まで走って闇市で上物のズボンを買ってきていそいそと迎えにでかけるのだから、おかしかった。

話は前後するが、兄貴といえは今一度、これはわたしたちが空襲で焼けだされ、和歌山の橋本という、おふくろさんの故郷で暫く暮らしたときのこと。生意気盛りの兄貴の素振りが、土地のおあにさんのカンにさわたつたのだろうか。脅かされて兄貴は家へとんで逃げ帰った。

—おかあちゃん、助けて。

次の間に入ってふすまを閉めた。おあにいさんは後を追ってこられ、悠然と離れの玄関にお立ちになった。

―息子さんを出してもらいましょか。

わたしは横のベランダで、大家さんとお嬢さんのままごとの相手をしてあげていた。

玄関先にびたりと正座していたおふくろさんは、わたしを指して、

―息子はあちらです。

と言った。おあにいさんにふりむかれて、わたしはすくみあがった。

―もっと大きいの。

おあにいさんは正確に兄貴を名指した。

―そんな息子はありません。

おふくろさんはシラをきった。おあにいさんは古風な方らしく、そのときになって懷からあいくちヒ口をだし、ぎとぎとするやつを、おふくろさんの膝の前の畳にずぶりと突き立てた。

―出せちゆうたら、出さんかい！

おふくろさんは身じろぎもせず、まともにおあにいさんを見返して、

―おらんゆうたらおりません。母親であるわたしが言うから確かです。

おあにいさんは、脱ぎ捨てた兄貴の靴に一瞥をくれた。おふくろさんは、わたしに向かって、靴はちゃんと揃えて脱ぐようにいつも言うてますやろ……と叱りつけた。

―そうかい、そうかい。理屈やな……。

おあにいさんはヒ口を抜きとって、帰ってくださいった。

兄貴はおそるおそる顔を出し、おふくろさんの「勇氣」に感嘆した。おふくろさんはまだ正面向いて正座した

ままだった。腰が抜けていたのである……。

もう一つ思い出した。

わたしが上京して、東京で編集者暮らしをし、やがて初めての本を出したお祝いに、おふくろが上京してきてくれた。昔、おとうさんにツバメ号でつれてきてもらって以来という東京であった。

人や車が多くて息苦しいというので、明治神宮へ案内した。ここなら広くて、息がつける。こんな広い空き地も東京にあるンかいな……とつぶやいていたおふくろさんは、大鳥居を見て、ここが明治神宮であることを発見した。そしてこっそりとわたしにたずねた。

— こんな広いところで、明治天皇さまが一人でやすんではいたら、寂しおますやろな。

そのあと、上の息子がまつられている靖国神社へ詣でた。さっきの言葉を思い出し、

— こんなせまいところへ、ぎょうさんぎょうさんの兵隊さんがいっしょにまつられて、さぞかしキュークツやろな。

と、こちらがいやみを言うのと、

— お黙り。兵隊さんいうたら天皇さまの家来。ちっとせまいくらい辛抱するのが当たり前だすやろが。

自分の息子が戦死したのに、そういう理屈しか考えつけないとは何事でありますか……と、こちらはぼやきたかったが、がまんした。おふくろさんの真剣そのものの目に、メイジと書いてあったからだ。

さてさて。

自分が母さんっ子で育ったのに、わたしは離婚することで、娘から母親なるものを取り上げてしまったことになる。罰として、こちらが母親がわりも兼ねた十年を送ることになる。母親業にも手を出さねばならなくなつて

初めて、わたしにはおふくろさんのいろんな顔がようやく見えてきた。おふくろさん流の理屈も分かり始めてきた。『優しさごっこ』『冬の光』という長編で、離婚後を描いたあと、『おれたちのおふくろ』で、おふくろさんを主人公にみたて仕立てた仕事をしているこのごろ、母親でもあるわたし自身と昔気質のおふくろさんが、いつも二重に合わさって見えてくる。わたしの内なる母親が見えてくる気がしている。マザーコンプレックスではない。そうした二人のおかあさんをちょっとのぞいてみたい。

## 2 死の周辺で

しばらくぶりの書きおろしで『おれたちのおふくろ』六百枚を、ようやく仕上げたところである。『ぼんぼん』『兄貴』に続く完結編というやつで、全部で千七百枚くらい。われながらよくもこんなに書けたもの——とびっくりしている。十年がかりの仕事だった。

最初からそんなに長い「年代記」など、書くつもりはなかった。あのいくさのさなかを、大阪の一人の少年が、『ぼんぼん』あかんたれ」としてどのように生きたかを確かめたくて書き始めた。

昭和十六年六月、おやじさんの突然の死から物語は始まるのだが、第一章と第二章を書いたところで、文章のテンポがきまった。このテンポをくずさずに書かないと、あの時代を生きた少年の日常生活のテンポがうそになると気づくと、これは長くなるなと思い、構想を改めた。連載は最初の予定の三倍ちかくになったが、それでようやく、一人の『ぼんぼん』と「にいちゃん」の戦争体験が描けた。その二人を支えたのは、元やくざの佐脇老人であった。

にいちゃんが自立し、弟（ぼんぼん）にとって頼りになる「兄貴」に脱皮したところを描いたのが、続編に当